□11月3日主日礼拝説教短縮版（隅野徹牧師）「主に望みをおく人は新たな力を得る」（イザヤ40:12～31）

山口信愛教会が覚える召天者の方々がなぜ、苦難の中で前を向いて生きることが出来たか。それは苦難のなかでも神が共にいて、慰め励まし続けてくださったから、そしてこの地上の苦労だけで終わるのではなく、天国で新しく生きることができると知ったからだと、私は確信をもって皆様にお伝えします。今回の聖書箇所では、外国の地で捕虜にされ希望の見えない中にいた民たちに対し、苦しみの中で共にいて下さる神の愛と、この世での苦しみを超えて確かにある永遠の命が証しされています。それが今回のメッセージの中心の28節から31節です。

30節に「若者も疲れ、弱る」という人間の現実が語られます。それは肉体の自然な反応です。しかし神はそのような、心が疲れた者にも力を与えると約束されたのです。これは気休めや嘘の約束ではありません。31節では「主なる神に望みを置く人が新たな力を得られる」と語られます。前の聖書の訳では「主を待ち望む者は新しく力を得る」という言葉でした。自分を叱咤激励し、自分の体に鞭打ってしゃきっとすることが、新しい力を受けることではありません。そうではなく主なる神に祈り自分を委ねることによって、神からの力を受け、その上で新しい一日一日を生きるということです。

その時、日々衰えていく肉体の現実とは反対に、歳月を重ねるごとに新たにされていくのです。そして死に打ち勝った神の御子キリストの復活の力が、この世を旅立ったあとも、私たちひとりひとりの命に働きます。山口信愛教会が覚えている召天者の皆様はこの地上の歩みを終えた今、疲れることも弱ることもない天の命を生きておられることを、今一度思い返していただけたら幸いです。私たちも同じ道をたどっています。イエス・キリストにあって疲れることのない新たな命をいただけることに、希望をもって歩んでまいりましょう。（終）